

静岡文化芸術大 工芸展

7月17日～8月2日

静岡文化芸術大講師で漆芸作家の小田伊織さん(中央)の作品を前に、企画展について話す同大の山本一樹教授(右)、高田和文名誉教授(左) 浜松市中区



伝統と挑戦の息吹 作品に

静岡文化芸術大(浜松市中区)では7月17日から8月2日まで同大で開催する企画展「手の愉悅—革新する工芸」の準備が進む。企画を担当するデザイン学部の山本一樹教授(62)は「伝統技が息づく手仕事で、新たな挑戦の息吹を感じる作品に焦点を当てたい」と準備を進めている。

陶芸や漆芸、型染、金工などに加えジュエリーやガラス、木工など現代の暮らしになじむ分野から選ばれた作家は20～80代の33人。繊細さと大胆さによって作品が生まれる「手仕事」に着目し、県工芸家協会などとも協議を重ねてきた。同大講師で自身も漆芸作家の小田伊織さん(35)は「学生や来場者に刺激を与え、活気あふれる展示会を目指す」と話し、創作にも気合がこもる。

同大は2018年、伝統的な建築や工芸の技を継承し創造性に満ちた提案力を備えた人材を育てる「匠(たくみ)領域」を新設した。同大理事、名誉教授の高田和文さん(68)は「日本の工芸デザインは世界も注目している。ものづくり県静岡にふさわしい人材を生み出すきっかけにしたい」と語った。同展に先駆け、県内企業の高い産業技術を紹介する関連企画展「先端技術展」も6月26日から開かれる。(文化生活部・柏木かほる)